

ジュディの進歩

——『足長おじさん』再読——

序

ジーン・ウェプスターの手になる少女文学の古典『足長おじさん』(一九二二)⁽¹⁾は、孤児院暮らしの女の子ジルーシャ・アボット(通称ジュディ)が文才を認められて大学にはいり、ジョン・スミスを名乗る資金提供者の孤児院理事「足長おじさん」に大学生活を手紙で知らせ、結局その人と結婚するというシンデレラ・ストーリー、ユーモアに満ちた学園生活を綴った少女向け小説ととるのが、一般的であったし、後年の映画版でも同様であった。主人公ジュディが、足長おじさんが実は恋する相手、ジャーヴィス・ペンドルトンと同一人物であると知り、ジャーヴィスのプロポーズを受けて終わるこの物語は、

越 智 博 美

オールコットの『若草物語』(一八六八)以降確立された少女向け小説の系譜に連なって、家庭にはいる幸せを歌い上げているかのようなものである。しかし、オールコットの作品のように「女性の領域」に取り込まれることをめぐる葛藤が殆ど見あたらない、あるいは、あからさまにおとぎ話となっていることも関係しているのか、フェミニストの再読の対象になることが殆どない。とはいえ、一九二二年という文脈に当てはめた時に見えてくるのは、生き方のモデルを提示する少女向け小説としては、従来型とは明らかに異なる図式である。確かにジュディは「結婚・家庭」という「女の幸せ」を掴むが、それはもはや一九世紀的な「本当の女らしさ」の枠に入りきるものではない。帝国主義、それを支える産業、社会進化論

等、様々な言説の交錯する場としての女子の高等教育制度、及び二〇世紀始めを彩った改革主義のただ中にあるジュディの成長物語は、「新しい女」の時代なればこそ「大衆版」シンデレラ・ストーリーであるばかりか、高等教育を受けることによってアメリカの帝国主義と改革主義の欺瞞を剥いでしまいかねない刺をもちらつかせている。

1 「進歩」の舞台

この物語をシンデレラ・ストーリーと捉えると、ジュディの成功の原因は明らかに従来とは異なっている。身よりのない女の子が幸せを掴むといえ、当時真っ先に挙げたはずの物語は、おそらくスーザン・ウォーナーの『広い、広い世界』(一八五〇)である。出版と同時にベストセラーとなり、今世紀の始めまで大西洋の両岸で売れ続けたこの作品は、いわゆるセンチメンタル小説の系譜に属し、広い女性読者を獲得していた。⁽²⁾主人公の少女は次々と降りかかる不幸をキリスト教的美德によって耐え忍び、牧師館の息子との結婚という将来の幸せをほめかして結末を迎える。この場合、不遇を抜け出す

武器は、まさにシンデレラのごとき「美德」である。

そもそも、ジュディが足長おじさんに書き送る手紙は、彼女の「進歩」progressを記すという目的があるのだが、ここで使われている“progress”という単語は実は、『若草物語』の四姉妹が自分達の努力の道と呼ぶ時のそれと同じである。マーチ家の姉妹はバニヤンの『天路歷程』(一六七八)——*Pilgrim's Progress*——の枠組みを敬虔な家庭の天使としての女性に至る道のたとえとして使い、その結果長女メグは敬虔な男性に「愛され、敬ってもらい」⁽³⁾婚約に至る。

ところが、ジュディの進歩はキリスト教徒としての特性や女らしさの美德のレベルを苦難を通じて上げることではない。確かにジュディの価値観とゴールは、少女達に人生のモデルとして多大な影響を与えた『若草物語』に通じるものを持っている。⁽⁴⁾彼女がモデルとする家庭は中流階級の級友サリーの、マーチ家同様の愛情に満ちた家庭である。物質的に豊かなだけのジュリア・ペンドルトンの家庭に対しては、マーチ家の姉妹が金持ちのマフオット家に対するのと同様で、憧れの気持ちを抱くわけではない。ジュディのゴールも婚約だ。ところが、彼女

の進歩は苦難を通じた道徳的なものではない。実際その他の点では女性の成長——progress——のモデルとなってきた『若草物語』で提示される価値のラディカルな書き換えではないかと思わせるほどの相違がある。学校の礼拝には出るものの、いわゆるピュリタニズムはジュディにとっては価値がない。ピュリタンの総本山コネティカット州の農園で休暇を過ごすジュディは、そこに住み込むセンプル夫妻のピュリタンの神を「狭量、不合理」等と一蹴し(96)、神様に祈っていても貧乏からは抜け出せないと考え(188)、マーチ姉妹式の「災難、悲しみ、失望を通じて道徳的精神が養われ」(45)、「大の都」に至るとする考え方にも真っ向から異を唱える。マーチ家のジョーのように作家を目指してはいても、彼女のように大作家になろうとは考えず、日々を楽しく過ごし、大作家になれなくてもよいと思う。にもかかわらず、まず作家という職業で自立することを考え、結婚をその職業と両立できる二次的なものと位置づける(175)。

ジュディの「進歩」とは、「近代的な高等教育と中流文化の獲得過程」それ自体である。というのも、彼女の恋人になる男性——足長おじさんは、彼女に会うことが殆

どなく、学業の進捗状況と学園生活で得た中流文化を紹介する手紙が彼女について知りうる大部分を占めるからである。孤児院にいた十八年間の「空白」(26)を埋めるのは、母の教えや聖書ではない。世間から隔絶されたカレッジ生活の全てがジュディに染み渡っていく。「タブラ・ラサ」であったからこそ、四年後に完成するジュディは学校教育の成果という「純正」製品となる。(5)

孤児院の育ちのジュディが資金援助を受けて入ったのは女子カレッジである。大きな買い物には列車でニューヨークに出て行き、級友サリーの兄のプリンストン大学生らと盛んに交流する格の高さからして、おそらく作者が一九〇一年に卒業したヴァッサー・カレッジをはじめとする東部の名門女子カレッジがモデルであることは間違いない。

従来女性には閉ざされていたカレッジの門は南北戦争後に開かれる。特に中西部の諸州が設立した農業、工業の職業訓練を主眼とするカレッジは、学生が少ないという事情も手伝って女子の入学を認め、家庭経済の科目を置き、労働者階級の子女を数多く受け入れた。一方東部にはそれらとは全く違った主旨を持った女子向け高等教育

育機関が誕生する。それが、セミナリーの伝統を継ぐヴァッサー、ウェルズリー、スミス等の女子カレッジであり、先駆者のマウント・ホリヨーク（一八三七）を除いては、いずれも一八六〇年代から八〇年代にかけて設立された。これらは、ハーヴァード、プリンストン、イエールなど東部の名門（男子）カレッジ出身の男性に釣り合うような洗練されて教養ある良き母たる女性、及び教師の育成を目指していた。これら女性向けのカレッジ教育は良き母を目指すという大義名分を持ち、アッパーミドルクラス以上の上流家庭の娘を集めたいわゆる「お嬢様学校」ではあったが、男女合わせたカレッジ進学率が一八九〇年でも三パーセントを切り、女子はその中の三割強という状況ではまだまだ「婚期が遅れる」など社会の規範にはずれるというイメージも強かった。しかし、一九世紀最後の三十年間で女子の大学生の数は約八倍になる。奨学金制度の整備もあって、仕事をして階級を上げたい労働者階級の娘や、自分をお嬢さんに見せたい中流階級の娘、仕事をした中流階級の娘が参入、女子カレッジは一部の金持ち娘の占有空間ではなくなっていく。ジュディが入ったのはこの時期の女子カレッジである。

2 頭の進歩

ジュディの受ける教育は中西部の専門学校的な実用主義カリキュラムとは完全に一線を画したものである。東部の名門女子カレッジが採用したのは、一八六〇年代にハーヴァード学長のエリオットが断行した選択科目制導入後の東部の男子カレッジのリベラル・アーツのカリキュラムである。ハーヴァードを代表とする東部のエリート校は一七世紀のラテン語、ギリシア語の古典語と文学、キリスト教神学、倫理学、物理学、数学、政治学、形而上学、修辞学という古典的な教養教育の上に、一八世紀半ば以降自然科学、現代語を加え、一九世紀には物理学、生物学、社会学、心理学等の新しい学問を新たに導入、さらに一九世紀半ばの自由選択科目制導入や科学技術、産業、経済の発展に応じた学問の導入で研究大学としての様相も備えていく。開学当初は有閑階級が将来政治家などの公人、あるいは医師、法律家などの高度に専門性の高い職業に立って行くための総合的な基礎教養をつけることを目指していたのが、一九世紀の改革後は従来型の公人、専門家にさらにビジネスの世界にも開けていく

のである。⁽⁸⁾

ジュディの学ぶ科目もこの線に沿っている。礼拝に行くと、宗教教育が行われる他、古典語(ラテン語)、論理学、幾何学といった古典的な科目にさらに近代的な生理学、化学、世界史、社会学、英語、フランス語、経済学、また、その一貫として一九〇〇年以降の女子大に独特の慈善事業と更正(感化)事業を学んでいく。実際、これらは当時の東部女子カレッジが用意している科目に一致する。⁽⁹⁾これらの科目を着々と吸収して、あるものは楽しく、あるものには不平を鳴らしながらジュディは「進歩」を続け、その教養はそっくりそのまま持参金となる。

ところが、作家の夢も社会改革者の夢も、手紙の中で語るだけで棚上げにされたままジュディが卒業と同時に婚約するという事情が何より雄弁に物語るのは、男子カレッジと同じリベラル・アーツの教養が、こと女子学生には「お嫁さん修行」にすり替えられるというリベラル・アーツ教育のダブル・スタンダードである。ジュディの言う通り、孤児院と違って「淑女の最終仕上げを施すところ」(一八)が大学なのである。リベラル・アーツ

の教育。男性の場合はあらゆる専門職への基礎教養として、その後法律家、医者、政治家等の専門職エリートとして生きる道を開いてくれる。ところが、当時男子カレッジが理想とした知的、身体的、道徳的にバランスのとれた教養を備えた「総合的、完全な男性」(Whole Man)の女性版「完全な女性」(Whole Woman)という理想的女性の雛形は、その実一九世紀半ばの宗教色に彩られた「真の女性らしさ」(True Womanhood)のイデオロギーがその衣を替えて再登場したものにすぎなかった。男性と同じ教育を受けても、職業を念頭に置かないがゆえに、また、同じ女性でも専門学校的な大学の卒業生とは違い、高等教養教育に逆にあだとなって、専門職への道が閉ざされたのである。そのため、例えば、男子カレッジのように中での「競争がないように」と一八九〇年代まで「成績評価」がなく、やる気を失う学生も多かった。⁽¹⁰⁾

しかし、物語はこういった矛盾を排除する。正確に言えば、問題意識の所在をほのめかしはするが、深追いはしないのである。『足長おじさん』の奇妙な点はここである。学業、キャンパスライフに関しては一九〇〇年代

初頭に生きる女子大生の生活を写し取っているが、そこに渦巻く臭い空気は抜き取られている。高等教育を受けた女性ならではの悩み、参政権運動の嵐や、外部からの高学歴女性へのバッシング、学生の職業への熱意、あるいは階級の多様性、そういった生臭いものを捨象してただひたすら教育を受けてよかった、という表層の利点だけで成立した「楽しい大学生活」読本といった体なのである。

ジュディはあっさりとロマンスを選ぶが、実際、女性でカレッジを卒業しても、いわゆる医師、弁護士等の専門職は殆ど男性の独占状態が続いていた。⁽¹⁾就職先としては、伝統的な職業として教師、専門職と見なされていた看護婦、ソーシャルワーカー、図書館職員ぐらいであった。それでも、伝統的な女性のカレッジ卒業者の中には最終的に家庭に入るとしても、その半数以上が、例えば、勉強の続行、他の女性向け職業よりも高収入を得られる、中流階級へのステップアップなど様々な思惑から教師の職に就いたほか、相当数がセトルメント活動などの慈善事業に携わっていた。また、一九一〇年代以降、文筆業があこがれの職業として隠れた人気を持つように

なるが、大学を出てものを書く第一世代がウェブスター本人のほか、ウィラ・キャザー、ガートルード・スタインなどで、彼女らはたいいていの場合学内の新聞、雑誌の編集、執筆に携わったり、コンクール、雑誌に投稿して腕を磨いた。⁽²⁾

教師もソーシャルワーカーも、「世話をする」。それに加えて後者は「慈善である」という限りにおいては産業としての経済活動ではあり得ず、その意味では従来型の女性の領域にとどまるものに過ぎなかった。同じリベラル・アーツを授かりながら女性は「女性化」された仕事の領域を出られない。しかし、一八九〇年代には、「新しい女性」というキャッチフレーズが、また、その後のセトルメント活動などのソーシャルワークも「ワーク」という言葉がついたことも手伝って、その矛盾は矛盾として名付けられることを免れてしまう。

しかし、リベラル・アーツを身に付けたからこそ、カレッジ出身の女性はその矛盾に気づかざるを得ない。カレッジでは民主主義を学び、制限付きとはいえ、学生自治が認められているために、委員選出の選挙活動が行われているのに、外へ出れば女性に参政権はない。彼女ら

に与えられているのは民主主義の疑似空間のみである。とはいえ、閉ざされた空間の外に出ることはなくとも、外の情報は入ってくる。外から招いた識者による講演会がしばしば行われ、例えばヴァッサーでは、トウエイン、ディケンズのような内外の作家、芸術家の講演の他、かなり政治的色合いの濃い講演会もしばしばで、一八七〇年代には、同カレッジの天文学教授で女性の権利に先鋭な意識を持って学生に多大な影響を及ぼしたマリア・ミッチェルの招きで、社会改革家で女性の参政権運動にも関与していたジュリア・ウォード・ハウが話をし、八〇年代にも社会改革家で婦人参政権運動家のメアリ・リヴァーモア、社会主義についてジョンズ・ホプキンスからR・T・イライが来て講演を行った。九〇年代に入ってから、当時プリンストン教授だった後の大統領ウツドロー・ウィルソンが民主主義を語り、エリザベス・スタントンの娘で婦人参政権運動家ハリエット・スタントン・ブラッチが女性の経済的立場について、また化学者で家庭経済を教えるE・S・リチャーズが女性の教育と職業について、フェビアン協会のウェブ夫妻も講演を行っている。二十世紀初頭にはジェーン・アダムズがハ

ル・ハウスを、「再度ウィルソンが『アメリカニズム』を語り、女子カレッジの塀中には世間の政治の風が吹き込んでいる。⁽¹³⁾キャンパスは教育の矛盾を意識した学生で溢れ、隔離された状況で講演を戦わせるうちにラディカルな思想の温床ともなっていく。特に一九一〇年前後には参政権運動の集会在頻々と行われ、その力を増していた塀の中で、その外に出るからは一層、学生は学問で得たが故の意識に悩んでいるというわけである。⁽¹⁴⁾

ところが、このような進歩の副産物としての現実足長おじさん、及び読者には知らされない。少なくともジュディの手紙からは、嵐の吹き荒れている様子は伺えない。嵐のような現実を抜かれた形であっさり指摘されるにとどまっている。クラスメートの当選のために選挙活動に奔走しながらも塀の外では選挙に関われぬいその矛盾を知らないわけではない。が、「私たち女性が参政権を獲得したら、おじさま達は男性の権利を守るために運動しなくてはなりませんよ」⁽¹⁵⁾とあくまでも明るい一言で処理済みである。

外からの情報といえば、塀の外の保守派の男性から浴びせられた女子学生バッシングも大変な盛り上がりを見

せていた。世紀末の女子大学生の急激な増加は逆に女子の高等教育に対する恐れにも似た反感をも引き起こす。一九〇二以降の十年間、女子学生をめぐる保守反動の嵐が吹き荒れる。シカゴ大学では女子学生が半数を超えたことが、男子学生に脅威を与え、その結果女子学生の増加は教育効果に悪影響を及ぼすとする論争が起こった。

また十九世紀後半から執拗に続く社会進化論言説も女性の学問や職業追求を科学の枠を借りた生物学的倫理で押さえ込もうとし、とりわけ出生率の低下を「人種の自殺」と警鐘を鳴らす。その立場からの攻撃は、学問を追求して頭にエネルギーを注ぎ込み、独立を求める「おとこ女」たる「新しい女性」は生殖機能が未発達なままにとどまるとするE・クラーク⁽¹⁵⁾、また、一九〇四年に東部女子カレッジの卒業生の婚期が著しく遅れていることを仔細に示し、高等教育を受ける女子を「結婚生活の束縛を嫌い」出産という「女性の機能」を果たしたがらない「去勢された」存在と断ずるG・スタンリー・ホールなどを挙げれば十分であろう。⁽¹⁶⁾

これについても、ジュディは「知って」いる。ジョージアから来た説教者による上記のようなタイプの説教を

聞いたあとで「それではどうしてあの人達は、男性の学校へ行つて、あまり勉強にあたまを使いすぎて男らしさをそこなわないようにと言わないのでしょうかね」(160)と鋭い認識を冗談の衣にくるんでおじさんに報告するがこの話題はこれで打ち切りで、この後ピクニックに行くのだと身体づくりも怠りないことを示して手紙を終えるのである。ジュディは悩まず現状肯定し、最後には元氣なお嫁さんになって「人種の自殺」説もはじきとばす。どうやら、お嫁さんになりそこねることもないジュディが学ぶのは、「危険な大学教育」ではなく、「学んで害はない大学のお勉強」であるらしい。

3 身体づくり——フィジカルカルチャーの吸収

アメリカン・ガールになるには頭だけでなく身体の成形も必要である。時は帝国主義、資本主義とダーウィニズム言説の息のかかった体育の時代である。頂上に君臨するのはアングロ・サクソン種の優秀性を喧伝し、人種の自殺を恐れて母性と子孫増殖を唱えるマッチョな健全男子の見本、セオドア・ローズヴェルト大統領⁽¹⁷⁾。一八九〇年代以降、男子カレッジのチーム・スポーツは資本主

義と戦争の世界で生き残る競争心を育て、同時にチームの成員がチームという大きな組織のシステムを支える一員として機能することを目指した。⁽¹⁸⁾ところが、女子大としては「おとこ女」を生む訳にはいかない。ここでは女性の「母たる資質」を高める教育が行われているのである。⁽¹⁹⁾この時期になると、体育はシステマティックに管理され、体育教師と医師が手を組んで、体育館で時間を経済的に使って弱点を「効率的に」修正し、アングロサクソン種に最もよい身体を作ることを目指していた。ジュディも体育館で縄やダンベルを使ったエクセサイズに励み、プールでは教師考案の紐で釣り下げられて水泳の習得を目指し、運動会に参加する。また、七〇年代に登場したスケート、八〇年代のゴルフ、九〇年代のテニスも盛んである。⁽²⁰⁾ただし、教師があからさまに不服をもらしたスポーツ——女性が男性のような競争に集中する有害なスポーツとして、学内外より批判を浴びるバスケクト——が、組み込まれているが、この作品では単なる楽しいものとしてその毒を抜かれている。⁽²¹⁾学校の外でもカーヌー、乗馬、釣りといった、中流階級が享受するスポーツが用意され、ジュディの身体もまた、中流女性のプロ

グラムを書き込まれてゆく。⁽²²⁾

4 心づくり——文化の吸収

さて、ジュディの学ぶのは、何も学校で用意された学問だけではない。女の子文化をも学習するのである。カレッジの仲間の範囲について、ここでも作者による巧妙な操作がなされている。彼女のカレッジ生活をとりまく級友は東部の上流階級のジュリアや、大工場の経営者の娘のサリーなど、見たところ暮らし向きの良い者ばかりである。親友のサリーはプリンストンに通う兄を持つ工場経営者の娘だし、ジュリアは上流階級の出という設定である。二十世紀初頭には働きながら何年もかけて卒業する学生も多く、東部女子カレッジは例外的に家庭に余裕がある学生が大半を占めるとはいえ、その高い学費から、中流階級の学生でも教師として初等・中等教育で稼ぎつつカレッジ教育を受ける者もいた。⁽²³⁾奨学金制度が存在しているという記述がその状況を示唆するが、それにしても、そういった学生の姿は描かれていない。また、移民、黒人等のマイノリティの姿も見あたらない。黒人女性は、特に東部女子カレッジではまだまだ見かけない

存在だとしても、移民の苦学生までもが物語から削除されている。その他、教師や理事との交流もない。ジュディが所属したのはアップバーミドル以上の女の子で構成された均質な共同体である。

塀に囲まれた孤児院の「社会性」ゼロ(105)の「空白」時代は文化不毛の十八年でもあった。だからジュディは級友の話すことが半分もわからないし、彼女らの冗談の意味も理解できない。それは、言葉というより、共通の知識の問題である。友人に追いつくために彼女がすることは、ひたすら「活字」を読んで周囲との知識の均一化を図ることである。ミケランジェロは芸術家である、昔人間は猿だった、エデンの園は神話である、「モナ・リザ」という絵があるという知識を得、メーテルリンクの『青い鳥』、マザー・グース、『ジェーン・エア』、『青ひげ』、『シンデレラ』、『アイヴァンホー』、『ロビンソン・クルーソー』、『嵐が丘』、『不思議の国のアリス』、『ある婦人の肖像』、『スコットの生涯』、『虚栄の市』、『若草物語』、『デヴィッド・コッパファイールド』、『宝島』その他のステイヴンソンの作品、ロマン派の詩、キプリングの小説、等々を授業科目以外に読みふけり、

『若草物語』の中のエピソードを理解すべくライムの塩漬けを買って実地体験にも余念がない。その甲斐もあって一年後には、どの階級の文化も共有しないアメリカの中の「外国」(108)たる孤児院から「飛び込んだ世界」(81)が「わが家」(59)になり、周りと同じ「ふり」(83)にも磨きがかかる。上級生になると特権的なクラブメンバーにも選ばれ、アメリカの「進歩の速さ」(114)を体現するジュディである。⁽²⁴⁾

こうしてジュディは、「中流の女の子文化」をも身につける。服装や日々の振る舞いもさることながら、一番大きいのは「空白」に主として印刷文化——彼女らの共有する読書体験——を刷り込むことである。そこに、孤児院では許されなかった「個性」という全米的特性をも身につけたジュディは、まさに、中流アメリカン・ガールという「想像の共同体」に参画したということになる。⁽²⁵⁾

5 アメリカン・ガールの製造・販売・流通

こうしてみると、ジュディの四年間は親もわからず「何人かもわからない」女の子(20)が孤児院という外国から中流層へ、中流アメリカ人のエトスを学習してそ

の階級に「同化」するという過程である。さらにはその一つ間違えば危険きわまりない女子大の教養教育を「楽しく」身につけ、社会改革の武器としない点で、まさに「お嫁さん」向きの女性に「仕上がる」過程でもある。「塀の外で使わない」教養は「美德」として「愛され」る条件を整えるのであって、ジェンダーのイデオロギーに抵触しない。またそれを語る書簡体の一人称小説は、当時のベストセラーとなったホレイショ・アルジャーの出世物語のパターン、あるいは、カーネギーを代表とする貧乏からはいあがるアメリカンドリームの自伝のパターンにも似ている。社会の「外から」同化したという点では、北欧移民のジェイコブ・リースの自伝 *Making of an American* (一九〇一)の女の子版と言ってもよいくらいだ。それが男性版と違うところは、ジュディの階級上昇は自分で自分の道を切り開くというのではなく、優しい男性に引き上げられるところから始まって女子カレッジに囲まれて玉の輿に乗るといふ受け身の上昇であって、あくまでも「社会のただ中に出て成功を求めるべきではない」女の子の出世つまり、結婚して世に出ない物語として書き換えられている点である。こうして、ジ

ュディは資本主義・帝国主義を裏から支えるシステムの一部として機能するプログラムを書き込まれ、立ち上げられる。

しかも、ジュディが、没個性の孤児院から「アメリカ」に入っているのは、孤児院の中でそれでも目に付く資質を備えていた、つまり文才という頭の良さと、お嬢様学校でも輝く「小柄な」「美しい」、おそらくはアングロサクソン少女だったから、言い換えれば、ジュディ自身が素質ある優等種として子を生み育てる役柄に相応しかったからである。⁽²⁶⁾彼女の物語は、玉石混交の中から見つけだされた玉、進化というガラスの靴に「最適な」生得の資質を持つ女の子として、民族を支える再生産過程に参入することを許される進化論シンデレラの物語でもある。

世紀転換期の帝国主義アメリカの女性に張り巡らされた様々な言説が絡みあうただ中にある、ジュディの身体と心。女性らしい枠からはみ出す発言を随所で口にしながらも、結局は家庭の天使の枠内へと回収されていくジュディ。しかし、当時の女子大をめぐるきな臭い論争の数々を敢えて避け、とりわけ「中流のおとぎ話」として

この話を提示すること——帝国主義を支える言説に身をゆだねること——こそ、この時期の論争を自ら体験し、嫁き遅れ女性となり、女性をめぐる言説の壁にぶつかりもしたヴァッサー出身の改革主義者ウエプスターの戦略ではないのか。女子大生をめぐる問題を避けて得られる効果は、女子大に対する負のイメージの払拭、肯定的イメージへの転化である。アメリカの進歩の足を引っ張らず、むしろ外へ打って出る男性を力強く支える母となる女の子としての女子大生像。

このイメージの受け手として想定されている急増する新中流階級は、一九世紀後半の産物である。南北戦争後、東部、中部の急激な産業化の拡大とともに、事務職、販売員、技術者等の新たな中流層が急増、一八七〇年からの四〇年間でその数約七五万六千から約五六一万人へと膨張した。⁽²⁷⁾規格化されて大量生産される工業製品のコンセプトはそのまま文化にも反映する。例えば、この中間層を狙った編集者ホレス・ロリマー率いる大衆週刊誌『サタデー・イブニング・ポスト』は、「ハイ・ブラウ」な文化を捨てて大躍進、一九〇八年には発行部数が百万部を超える。広告で分厚くなったこの雑誌は、中流のア

メリカをこそ「アメリカ」と位置づけ、その百万読者のオビニオン・リーダーというよりはオビニオン・メーカーとして中流文化、中流イデオロギーを牽引、マス・カルチャーを生み出し、セオドア・ローズヴェルト率いる共和党の拡張政策という名の帝国主義を支えていく。⁽²⁸⁾彼らの世論形成の一例が、婦人参政権の扱いである。二〇世紀も一〇年目を迎えようとするころ、『ポスト』は、さらに販路の拡大を狙い、従来の中流ビジネスマンに加えて、女性も読者層に取り込もうとするが、折しも参政権運動が一般にも高まりつつあったころであった。これまで通りに男性の側から茶化すという訳にもいかず、その結果の戦略は、「毒抜きによる流通」である。つまり、「ご婦人方が、家庭の仕事をきちんとかなしたついでに選挙に行っても構わないではないか」と、参政権を与えることを鷹揚に許すという論調で、女性にとって二次的なものとするので参政権が持ちうる潜在的な力を骨抜きにしつつ、婦人参政権にまつわるラディカルな改革イメージが男性に引き起こす恐怖感、男性にとっての毒を拭いさり、世論を操作しようとするのである。⁽²⁹⁾

ローズヴェルト大統領自身も服を着たイデオロギーと

して自らの「健全なる」マッチョな身体を大衆の視線のもとに流通させる。『フィジカル・カルチャー』誌の表紙として(一九〇四)、「ティディのアフリカ冒険人形セツト」(二九〇九)として、フロンティア・スピリット溢れるスポーツマンは無害なお茶の間のアイテムとして消費される⁽³⁰⁾。

ジュディの物語は、まさに、『ポスト』式、大衆向けに毒抜きをした「女子高等教育」の宣伝パンフレットとして機能する。女子大をめぐるきな臭い論争——社会進化論、売れ残り問題、参政権運動、セトルメント等の改革運動——はすべてヴェールで覆って大衆のもとに差し出される女子大の「明るい生活」。丁度女子大が出していたガイドブックのように、世間の中流少女たち及びその親たちに大学の安全性を説き、その下の階級の少女にはステップアップのモデルを提供する。使って安全な「女子大」。このための情報のトリミングは、電話機を始めたとする工業デザインを思わせる。人間工学を利用し、千人もの人を使って持ち方から角度から研究し、AT&Tの「万人むけ」の受話器を作ったデザイナーのように⁽³¹⁾、ジュディをめぐる言説も作者による巧妙な操作を受け、

万人向きに加工されている。

世の男性方が恐れるイメージ——ラディカルの園、嫁き遅れ製造工場、人種の自殺促進機構——は全て払拭される。例えばG・スタンリー・ホールのような科学者が世に送る主張——社会進化論の中で不平等こそを自然の掟であるとし、「男性の女性に対する関係はハーヴァードとヴァッサーのそれ」であり、男女の高等教育の差は男性がそれを超えて専門家への道を歩むのに対し、女性はその教養を男性のサポートに使うとする主張⁽³²⁾——にヴァッサー出身、かつ嫁き遅れ路線を歩むウェブスター(結婚したのは一九一六年、三九才の時)はさしあたり話を合わせて、「たとえ大学を出てしまった女でも、きちんと身体を鍛えて、世に出る野心を抱かない母になれる」ことを提示する。中流消費者に向かい、実例ジュディを使って、「持っているといふとこんな利点が」と大学教育の効能を説くプレゼンテーションの方法は、実はこの時期以降、特に第一次大戦後に盛んになる広告のレトリックである⁽³³⁾。社会改革家ウェブスターが選んだのはソフトなパッケージング。中流保守の言説を借りて製品化、販売、流通させた「楽しく役立つ大学教育プログラム」は、

「大学へ入る娘がいる現実」の生産をもくろむ言説なのである。

6 パッケージの向こう側

ところが、裏には痛烈な皮肉が隠れている。孤児院の塀の中から救われて、女子大という新たな塀の天国へ、その中でも男女の不平等を不問に処したご褒美に、さらに上流階級の壁の中へ……恋人ジャーヴィスが、足長おじさんとしてはジョン・スマスを名乗っていたことを考えると、彼とジュディの結婚は、建国の英雄ジョン・スマスと彼の命を救う恋人ポカホントスを想起させる。この二人のロマンスはナシヨナリズムの高揚する時期には決まって頻々と登場する必須アイテムである上、一九世紀には大衆芸術としても浸透する。特にこの本の出版される五年前、一九〇七年はスマスゆかりのジェームズタウンの設立三百周年を祝い、ジョン・スマスの名が各地で改めて聞かれたという事情もあった。⁽³⁴⁾ キリスト教を受け入れてアメリカ人に同化・吸収されアメリカの内なる他者として管理されてゆくポカホントス——先住民族——と、孤児院という「外国」から救い出され、「奥様」

として隠れるジュディ。当時の読者は、一時的にでもジュディをポカホントスに変身させることで民主主義の守り手としての帝国主義アメリカの女性支配が実は植民地支配イデオロギーに他ならないことを言語化しないまでも、イメージとして焼き付けたかもしれない。一八四八年に奴隷Ⅱ女性という連想をやった彼女たちなら、孤児院Ⅱ女のコミュニティⅡ妻の領域Ⅱ先住民族の領域というイメージを連想したかもしれない。続編では彼女はサリーが手紙を書く相手として、さらに読者から遠ざかる。

ところが、ことはそこにとどまらない。帝国主義の理想の女となったジュディの相手、社会改革主義者のジャーヴィー坊ちゃまは、何より病弱である。瘦せた脆弱な姿は「適者」アングロサクソンの血を引きながらも人種の退化という憂えるべき事態を予感させる。ジョン・スマスというアメリカの建国の英雄の名の彼と、マッチョなローズベルトとのなんたる差。本来文明プラス健康的という完璧なイメージを持つはずのスマスの健康さを取り戻すために、ポカホントスのごとき——アングロサクソンであると予想はされるが素性の知れない——ジュディ

が、退化した優秀種の救い主、新たにアメリカを作る民族再生の一翼を担う。教育でアメリカ人になるジュディは、民族再生のヒロインへと物語の主導権を握ってしまったのだ。続編 *Dear Enemy* (一九一五) における彼女はペンドルトン家という独立以来の名家の中からサリーに孤児院改革を命じる。丁度、マーチ家の不在の父が手紙の声だけで四人の娘を進歩の途につかせたように、声——ロゴス——を獲得し、あくまでも奥様として奥にいながら隠然たる権力を發揮し、社会の中心から既成の枠を転覆させかねない改革を狙う。もちろん政治は学内政治でシミュレーション済みである。

ジュディに施された慈善は男性エリート、特にカーネギーやロックフェラーなどの大立者が、「適者」となる可能性のあるものだけを選び、上から引きあげてやる、というタイプのものであった。ところが、「選択科目制」のカリキュラムで取った慈善授業や、孤児院の没个性的な経験から、奥様ジュディの想定する福祉はセトルメン的なものである。「適者」の側から取り残された側へと(サリーが)入っていく。例えば全員にギンガムのワンピースを着せて個性をなくすのではなく、違うものを

着せて個性を出す。没個性という個性で孤児をマージングし、社会の周縁へ追いやっていた体制の擁護者には、脅威となるような、ラディカルな改革ファンタジーの序章が、『足長おじさん』なのである。

結

一九世紀末から第一次大戦にかけての改革主義 *Progressivism* は、保守、革新入り乱れてのそれぞれの思惑による「進歩」を求める時代であった。改革＝進歩を求める流れは、学者、聖職者、を始めとする専門職の人々が先導し、それに都市の中産階級が賛同、独占企業の告発、労働問題の改善、女性の参政権問題、教育の改善、貧民救済など多岐にわたる。

しかし、その進歩は、国外に対しては拡張主義という名の帝国主義として現れる。アメリカの帝国主義は、帝国の周縁に他者を置く「植民地」主義ではなく、むしろ他者を内側に困いこんだ「拡張主義」という名のもとに推進される。そもそも国境——フロンティア——を拡張していく過程でアフリカ系アメリカ人と先住民族に「野蛮で劣等」というラベルを貼って、それぞれ奴隷制と居

留地政策の中に困い込み、彼らの文化と言葉を奪い、キリスト教と英語を押しつけて植民地化していく過程がそうであった。一八九〇年のフロンティア消滅後、一八九八年にハワイを征服し翌年には、立て続けにフィリピン、プエルト・リコ、グアムへ、さらにはパナマ運河周辺（一九〇四）にも勢力範囲を拡張していくにあたり、時の大統領セオドア・ローズヴェルト（在一九〇一—一九〇九）は、国内で急増した工業製品の海外市場獲得を目的としていながらも、デモクラシーを守る「世界の警察」として出動するという大儀名分を掲げ、二代後のウッドロー・ウィルソン（在一九一一—一九二〇）もまた、海外市場の必要性を認めつつも「世界を民主主義にとつて安全な場所にしなくてはならない」とつけ加えることを忘れない。⁽³⁶⁾「民主主義国家」における孤児院とは、まさに内なる他者・植民地である。管理され、アメリカ人の印「個性」の獲得すら阻まれた「不適合者収容所」にはかならない。丁度奴隷が所有物であり、インディアンは市民ではなかったように、孤児もまたアメリカ人ではないのだ。同時に、女性にとっての民主主義と選挙権も女子大の扉の中でしか存在しない。

ジュディの「進歩」——progress——の物語は、時代の言説にあからさまにとりつくことによって、逆に *pro-gressivism* の名の下に隠蔽されてしまうものの存在を、つまり、progressを許されないものを存在を暴きだす。progressに値すると判断したものをだけをすくい上げ残りは扉の中に残しておく排除の論理を明るみにする。こうした毒を隠し持って、穏やかな改革主義者でフェビアン・シンバ（128）のウェブスター女史⁽³⁶⁾による『足長おじさん』——「楽しい大学生活」12——は誕生間もないマス・カルチャー市場に出回ったのである。

- (1) Jean Webster. *Daddy-Long-Legs* (New York: Century, 1912; Tokyo: Yohan Publishing Inc, 1978) 以下、本書からの引用は本文中に（ ）内にページを記す。
- (2) Jane Tompkins. *Sensational Designs: The Cultural Work of America Fiction 1790-1860* (Oxford: Oxford University Press, 1985); Nina Baym, *Women's Fiction: A guide to novels by and about women in America 1820-1870* (Ithaca: Cornell University Press, 1980).
- (3) Louisa M. Alcott. *Little Women* (1868; London, Puffin Books, 1994), p. 137.
- (4) Barbara Sicherman. "Reading Little Women: The

Many Lives of a Text" in eds. Linda Kerver, A. Kessler-Harris, K. K. Sklar, *U. S. History as Women's History: New Feminist Essays* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1995), pp. 245-266.

(5) 東部の女子カレッジは完全に外の世界と隔絶されている。学生がその中でだけ生活するのが基本で、男子学生のやうに大学町を自由に歩き回れるやうにはできなかつた。例えば、スンドルトン氏が級友ジュリアを訪ねて来る場合ですらも、厳格な身分証明の手續きを要求されているが、これは当時実際にあつた状況である。Helen Lefkowitz Horowitz, "Hull-House as Women's Space" in ed. Nancy Cott, *History of Women in the United States: Historical Articles on Women's Lives and Activities*, Vol. 17 (New Providence: K. G. Saur, 1994), pp. 391-425.

(6) それ以前、十八世紀末から十九世紀半ばまでキリスト教徒としての妻、母、教師と見られるからセシナリー、マカネシーと呼ばれる女性向けの高等教育機関があつた。経済的に余裕のある家庭の女子を集めて「教養ある母」育成を旨として男子カレッジでの学習内容(古典語、数学、化学など)も取り入れるようになっていたが、こういふ状況も女子カレッジの設立の下敷きとしてあつた。Barbara Miller Solomon, *In the Company of Educated Women: A History of Women and Higher Education in America* (New Haven: Yale University Press, 1985), pp. 1-55.

(7) 進学率については Patricia Albjerg Graham, "Ex-

pansion and Exclusion: A History of Women in American Higher Education" in ed. Nancy Cott, *History of Women in the United States: Historical Articles on Women's Lives and Activities*, Vol. 12 (1993), p. 225. 一八七〇年から一九〇〇年までの間に女子学生数は一万人から八万五千人へと飛躍的に増大する。Solomon, p. 58.

(8) H. G. Good, *A History of American Education* (New York: McMillan, 1956).

(9) Solomon, pp. 79-93.

(10) Solomon, p. 96.

(11) 一九一〇年の段階で、医師、弁護士等の専門職は九五パーセントほどを男性が占めている。Solomon, p. 127.

(12) これに続く世代では、マリブナム・ムーブ、ヴァブスターと同じくヴァッサー出身のエドナ・ヴィンセント・マレー、ミリエル・ルーカイザーら。Solomon, p. 129.

(13) Jessica Thaler, *Vassar History, Internet Edition* (Vassar College Official Home Page, 1996).

以下、ヴァッサーに関するデータは特に注で言及しない限り、このカレッジ史に準拠する。

(14) 女性がする仕事として認容されていたセトルメント活動は、実際大学で学んだことを社会に生かす場のない事実上、に苦しむ卒業生の一種のかけ込み寺としての機能すら果たしていた。教育を生かせないという悩みは、実際アメリカにおけるセトルメント活動の指導者、アダムズ自身が抱えていた問題でもあつた。Jane Addams, *Twenty Years at*

- Hall-House (Phillips Publishing Company, 1910; New York: Signet Classic, 1961), pp. 90-100.
- (11) Cynthia Eagle Russett, *Sexual Science: The Victorian Construction of Womanhood* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1989). シンシア・イーグル・ラセッテ、上野直子訳『女性を捏造した男たち——ヴィクトリア時代の性差の科学』(工作社、1994) 一五二—一六三頁。
- (12) G. Stanley Hall, *Adolescence: Its Psychology and Its Relation to Physiology, Anthropology, Sociology, Sex, Crime, Religion, and Education* (New York, 1908) quoted in Solomon, pp. 60-61, 118-121.
- (13) Richard Hofstadter, *Social Darwinism in American Thought* (Revised Edition) (Boston: Beacon Press, 1955). R・ホフスタター、後藤昭次訳『アメリカの社会進化思想』(研究社出版、一九七〇) 一一二—一二九頁。
- (14) Donald J. Mrozek, *Sport: and American Mentality, 1880-1910* (Knoxville: The University of Tennessee Press, 1983).
- (15) Carrol Smith-Rosenberg, and Charles Rosenberg, "The Female Animal: Medical and Biological Views of Women and Their Role in Nineteenth-Century America" in eds. J. A. Mangan and Roberta J. Park "Fair Sex" to Feminism: *Sport and the Socialization of Women in the Industrial and Post-Industrial Era* (London: Cass, 1986), pp. 13-37.
- (16) Harvey Green, *The Light of the Home: An Intimate View of the Lives of Women in Victorian America* (New York: Pantheon Boos, 1988), pp. 144-164. グリーン、ホーンは中流階級以上に普及したものである。
- (17) スケートの持つた問題、及びウエブスターが大学生の「パチ」シリーズの中でスケートを大きく取り上げる理由、スケートに反抗している理由は、Sherry Innes, "It is Pluck, But—Is It Sense?: Athletic Student Culture in Progressive-era Girls' College Fiction," in ed. Claudia Nelson and Lynne Wallone, *The Girl's Own: Cultural Histories of the Anglo-American Girl, 1830-1915* (Athens: The University of Georgia Press, 1994), pp. 216-242.
- (18) Harvey Green, *Ibid.*
- (19) ウェブスターは一九〇五年に学費、住居費合わせて五〇〇ポンド。Thaler, *Ibid.*
- (20) 女子大のクラブ活動は、場合によってはメンバーを選ばない存在で、それ故にクラブのあり方に対する大規模な反対活動が学内で起ることもあった。Solomon, p. 108. シェン・ソロモン、たいたいたがムストーリーから排除されている。
- (21) Benedict Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism, Revised Edition* (London: Verso, 1983; 1991).

- (26) 性選択の理屈から言えは、女性はいさく弱々しい方が、女としての完璧に近々。リチャード、前掲書、一〇八—一六三頁。
- (27) M. K. Cayton, H. J. Gorn, P. W. Williams eds, *Encyclopedia of American Social History*, 3 vols. (New York: Charles Scribner's Sons, 1993), p. 615.
- (28) Jan Cohn, *Creating America: George Horace Lorimer and The Saturday Evening Post* (Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1989).
- (29) *Ibid.*, pp. 60-99.
- (30) Harvey Green, *Fil for America: Health, Fitness, Sport and American Society* (New York: Pantheon Books, 1986), pp. 233-242. ロースヴェルトは、種の進化思想と体育の結びつき、及びその言説の担い手であった。
- (31) Phil Patton, *Made in U. S. A.: The Secret Histories*

- of the Things That Made America* (New York: Penguin Books, 1993), pp. 331-340.
- (32) リチャード、前掲書、二三六頁と一八八—一九〇頁。
- (33) Roland Marchand, *Advertising the American Dream: Making Way for Modernity, 1920-1940* (University of California Press, 1985), pp. 1-24.
- (34) Robert S. Tilton, *Pochohontas: The Evolution of an American Narrative* (Cambridge: Cambridge University Press, 1994).
- (35) Eric Foner, J. A. Garraty, eds., *The Reader's Companion to American History* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1991), pp. 364-369.
- (36) 一八九八年四月、ウェブスター、在学中にフェビアン協会のウェブスター夫妻がヴァンナサーで講演を行っている。(一橋大学専任講師)